

A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI

TOSABUSHI

とさぶし

特集
まんが王国・土佐



No
39



TAKE FREE



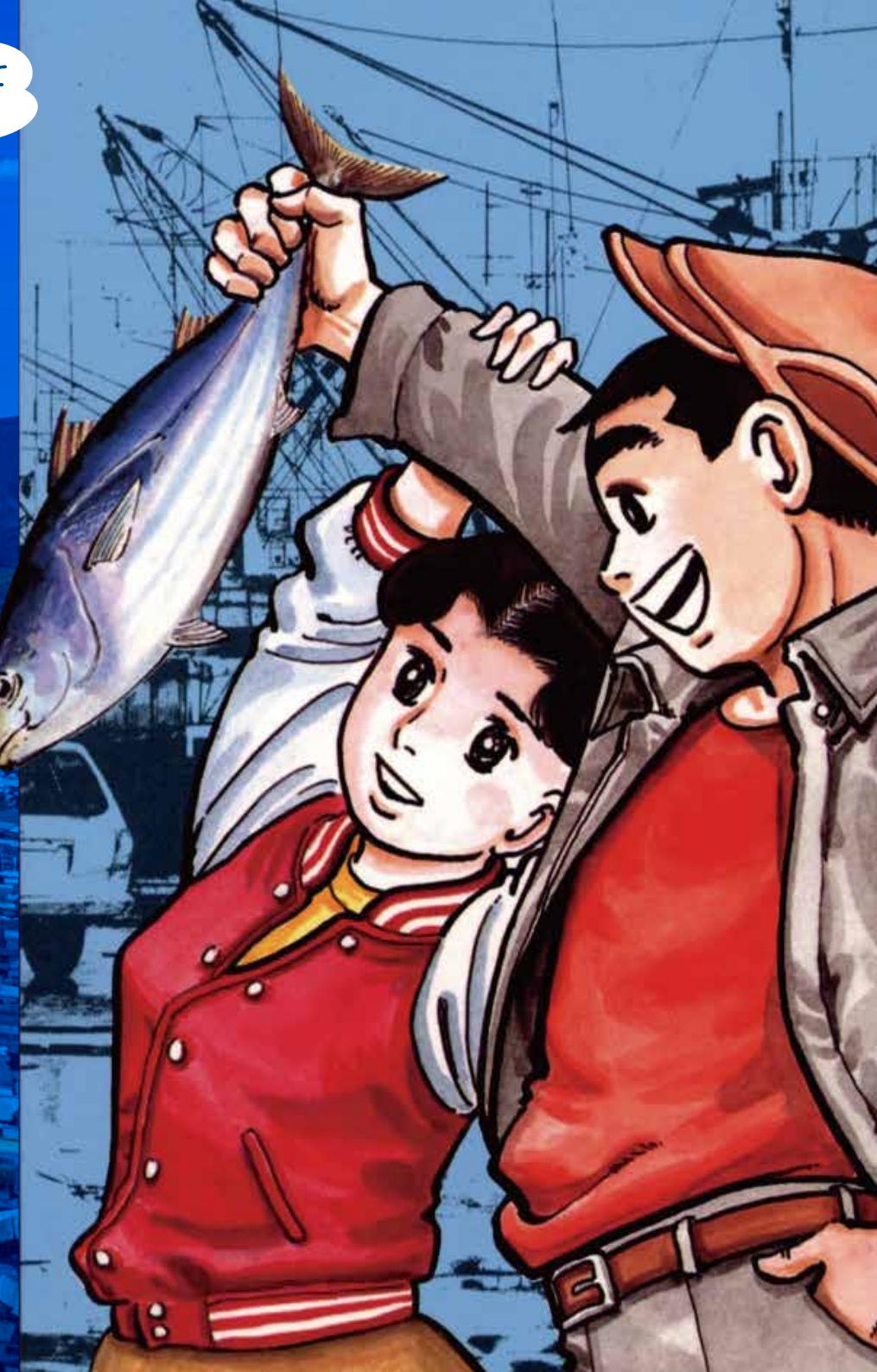
訪ねて
発見！

まんが 土佐が王

高知は、まんが文化が栄える王国！
実際に訪ねて、「まんが王国・土佐」を探してみよう！
いろいろなところに、まんが文化の香りがある。
例えば、カツオを誇る漁師町にも…

まんが『土佐の一本釣り』

高知県香美市出身の漫画家、青柳裕介先生（あおやぎゆうすけ、1944～2001）の代表作。昭和50年から「ビッグコミック」（小学館）にて掲載された、漁師町に生きるカツオ漁師の青年・純平と恋人・八千代の物語。映画化も実現し、「高知と言えばカツオ」というイメージのきっかけになった作品とされる。



カツオとまんがの 漁師町を訪ねて



「父の作品は故郷が題材。生涯を通じて、高知でまんがを描き続けました」と話すのは、まんが『土佐の一本釣り』を描いた青柳裕介先生のご子息であり、自身も高知のまんが文化を盛り上げる吉村領さん。「父の作風は自分が体験したものをつけショボンとして描くスタイルだったんですよ」と、先生の創作の原点を振り返る。

「まんがを描きたい」という一心に駆られ、少年時代から夢を追い続けた青柳先生の『土佐の一本釣り』は、やがて一世を風靡（ふうび）。土佐のカツオ漁師の人情味あふれる生き様をリアルに描いた物語は、日本全国のまんがファンはもちろん、何より地元住民から共感を集め、深く愛されるようになった。町は「カツオの



『土佐の一本釣り』を描いた大漁旗や、純平と八千代の名前を冠する津波避難タワーなど、町のさまざまなところに作品の足跡を見つけることができる。



昭和43年、高知県香美市生まれ。まんが王国・土佐推進協議会委員や「こうちまんがフェスティバル」実行委員長を務めるなど、高知のまんが文化を盛り上げるキーパーソン。地元漫画家らとまんがに関する仕事を請け負うNPO法人「マンガミット」の理事長としても活動。

よしむら りょう
吉村 領さん

03

弘末さんが選ぶ!
番外セレクトショーアイ



「三本の○○」というテーマに、まさかの人名をあて、「衝撃的だった」と言う作品。若き高校研究部員らしい、自由な発想があふれている。

22回大会予選/テーマ「三本の○○」/東京都芝高校



弘末さんが「これまでの30年で一番好き」と話す作品。惜しくも本戦出場を逃したが、無言の中で、隅々まで優しさが描かれている。

17回大会予選/テーマ「居場所」/島根県立松江南高校



過去の大会すべての予選に出場しているのに、本戦まで勝ち進んだことがない春野高校の作品。顧問の先生もソックリなんだとか。
20回大会予選/テーマ「20年」/春野高校(高知)



本戦終了後は、全国からまんが甲子園に集った高校生たちの交流を盛り上げる、交流会を主催。好きな作品について語り合い、最後は熱いダンス!



大会に向けて、お互いを紹介する「非公式ガイドブック」を発行したり、会場に部活紹介をするブースを構えたり。スタッフとして参加する地元ペン児たちも、やはり描くことに夢中なのだ。

理屈ではない高校生の情熱 夢中になって描き続けてきた



本戦競技中、作品制作のアシスタントを務める「番屋」さん。由来は定かではないが、高校生が自ら名付けたとされ、地元のペン児が画材を洗浄したり、交換水を補充したり。



本戦まで勝ち進んだ高校ペン児たちが、情熱を込めて描き上げた作品。それを緊張した面持ちで審査室まで運ぶのも、同じくまんがを愛する高知の高校生だ。

教えて! 「名ウラ方」 まんが甲子園のウラ側

大会を盛り上げたい ずっと描き続けたい

高知といえば、日本全国はもちろん、海外からも「高校ペン児」たちが集まる「まんが甲子園」。白いTシャツを着て、選手たちを支えるスタッフを務めるのは、地元・高知県のペン児たちだ。



大会を支えるのは
地元ペン児たち!

まん研部員の情熱が つくり上げる大会

「まんが甲子園」と言えば、お

よそ300校のまんが研究部等の中から、まんがを描く高校ベ

ン児たちが参加する祭典。本戦

に参加するペン児はもちろん、スタッフとして大会運営を担う

地元・高知県のペン児たちもまた、その情熱を燃やす。それはこ

の大戦の原点から、ずっと受け継がれるものだ。

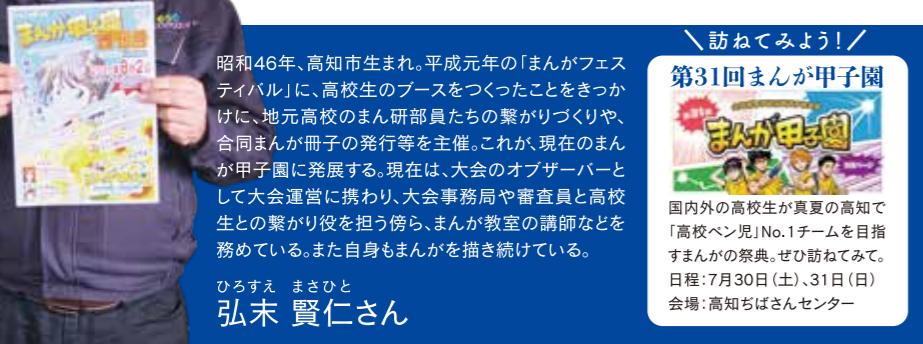
平成元年ごろに、当時高校生だった弘末賢仁さんらが自主的に始めた「学校の垣根を越えて交流しよう。」という文化活動が、まんが甲子園の前身。高知のペン児たちの交流を求める思いが、この大会をつくり上げた。

昨年、第30回を迎えたまんが甲子園。弘末さんもオブザーバーとして大会に関わっており、地元高校生のサポートを続けて

いる。「今も昔も、主役は高校生。スタッフを務めるのは、予選で敗退してしまった地元のペン児たちですが、大会を盛り上げたい、まんがを描きたい」という

昭和46年、高知市生まれ。平成元年の「まんがフェスティバル」に、高校生のブースをつくることをきっかけに、地元高校のまん研部員たちの繋がりづくりや、合同まんが冊子の発行等を主催。これが、現在のまんが甲子園に発展する。現在は、大会のオブザーバーとして大会運営に携わり、大会事務局や審査員と高校生との繋がり役を担う傍ら、まんが教室の講師などを務めている。また自身もまんがを描き続けている。

ひろすえ まさひと
弘末 賢仁さん



思いで、まんが甲子園を支えています」。本番の準備を自主的に進めながら、自分たちもまんが冊子を作ったり、好きな作品を語り合ったりと交流を楽しむ。本戦に進めなくとも、高知県のペン児たちには、まんが甲子園の夏が来るのだ。高校生らしい自由な発想で、これからも大会を盛り上げてゆく。

人気漫画家が高知に集結!!

漫画家大会議 in まんが王国・土佐



全国の人気漫画家が集結するイベントが、高知県で開催されていることをご存知だろうか。その名も、「全国漫画家大会議 in まんが王国・土佐」。令和4年3月に開催されたイベントのゲスト漫画家を紹介すると、安倍夜郎、うえやまとち、浦沢直樹、大沢俊太郎、オトクニ、くさか里樹、久住昌之、小林鉄蟲、曾田正人、ひのもとめぐる、武論尊、マキヒロチ、正木秀尚、Moo.念平、村岡マサヒロ、森川ジョージ、森田将文、山田ゴロ(50音順・敬称略)。漫画家による熱いトークライブをはじめ、ライブドローイングやまんが教室等が催され、地元はもちろん全国からもまんが好きが集まり、まんがを通じた交流を楽しんでいる。「まんが王国・土佐」らしい、まんがのお祭りなのだ。

「漫画家になる前は、福祉施設で働いていた」と言うくさか先生。そんな当時の経験から、「高知の元気な高齢者が、現代の『生と死』の概念を痛快に笑い飛ばす」というイメージが頭に浮かび、それが代表作『ヘルプマン!』のテーマになった。くさか先生は自身の作風について、「勧善懲惡の物語ではなく、『どんな人も分かり合える』という思いがベースになっています。それでたぶん、高知の人への影響なんですよ」と話す。「『高知家』つ

作風のベースにあるのは 受容性に富む県民性質

て言葉があるように、高知県民には、誰かの良いところも悪いところも受け入れてくれる、家族みたいな人が多い。それが、いい意味で「香氣」というか、まんがっぽいというか。長く住んでいて、改めてそう思える」。

近年、くさか先生は「まんが甲子園」の審査員を務めるようになり、毎年夏になると「高校ベン児」たちが見せる若い感性に刺激を受けていると言う。「高校生が仲間と必死になつて感性を共有し、ペンを走らせる姿は本当に感動します。これからも、高知発のまんが文化と一緒に広げていきたい」と話してくれた。



自身の経験と高知の県民性を掛け合わせて誕生した『ヘルプマン!』は、第40回日本漫画家協会賞大賞を受賞。新シリーズ『ケアママ!』や、『ケイリン野郎』なども人気作だ。

「ご当地漫画家」に聞いた

高知で描くワケ

高知在住の漫画家たちは、なぜ地元で仕事をするのだろう?
それは作品にも影響している? 漫画家を訪ねて、教えてもらった。

『ケイリン野郎』や『ヘルプマン!』などのヒット作を世に送り出してきた漫画家、くさか里樹先生。昭和55年のデビュー以来、執筆の拠点は、ずっと変わらず地元・高知県。今も昔も、香美市内にある行きつけの喫茶店でネームを描いている。高知を離れない理由について、くさか先生は、「創作活動と普段の暮らし、どちらも大事にしたかったから」と話す。まんがは創作の世界だが、集中してまんがを描く仕事場から外に出れば、普段の暮らしが、あってほしい。創作活動という「非日常」と、暮らしという「日常」を繰り返すほど、自分自身が精神的に健康であることが大事だと、くさか先生は感じた。「まんがはあくまで自分の一部にすぎません。私は、母親でもあります。今では地域のおばちゃんです。ここが生きやすい場所だからこそ、高知にいるんですよ。」

創作活動の拠点は 暮らしやすい場所に



香美市にある仕事場兼自宅にて。デビュー以来、ここで作品を描き続けている。



く、描いてみたい人が、本当にたくさんいると思います。でも、「何を描く?」「どうやつて描く?」がわからない。だからこそ、ここで描き方を教えてあげたいんです」。実際に作画体験をした川村さんは、「アドバイスひとつで、驚くほど上手に描けるんですね!」と驚き。さらに、同じテーマでイラストを描いていた中学生の女の子とも交流。「共通の趣味を持つ友達が増えました! 休みの日に通つてみたんです」と、まんが文化を楽しんでいた。

は、小中学生を中心に、夢中に
なつてまんがを描く人たちの姿
を見ることができる。

気軽に訪れて
まんが文化を楽しむ

未来の漫画家が ここから誕生！? まんが文化を発信！

体	ま
験	ん
記	が
	B
	A
	S
	E

まんが文化を発信する、「高知まんがBASE」。
でも、どんな施設？ どんな人たちがいるの？
まんがファンの高田晃氏、「寸き」と「替人」にてよう。

まんが講座では、基本的な作画技術や画材の使い方を指導。不定期で、安倍先生と井上先生による講座も行っている。



**四十万から目指せ！
プロの漫画家！**

に、画材に触れる機会や描き方を教えてあげられないか」という思いを伝えたところ、心強い賛同を得られたのだ。

職業もさまざまだ。「まんがを描く楽しさはもちろん、人に見てもらえる喜びも知つてほしい」という思いから、地元の天神橋商店街に設けた部室でまんが講座を開いたり、部員たちの作品をまとめたまんが冊子の発行や展示会などをを行う。

本気でプロの漫画家を目指す部員の作品は、安倍先生と井上先生にも送り、アドバイスなどをもらう。近年では、地元企業や市役所から仕事を依頼されることもあり、「まんがを通じて地元の活性化にも貢献したい」と語ってくれた。

四万十漫画倶楽部の代表。高知県立中村高校の出身で、代表作『深夜食堂』で知られる安倍夜郎先生は先輩、ゲームイラスト等を手がける井上淳哉先生は後輩という間柄。同人活動を経て、もう一人の発起人である舞人さんと出会い、平成28年に「四万十漫画倶楽部」を発足させる。現在は、地元小学校でまんが講師も務める。

たなべ
田辺 リカさん

歴史を刻むまんがグループ

「高知漫画集團 くじらの会」

清
王氏



かけに集い、スタイルは謹
えど、ともに昭和50年
代から地域に根差した
活動を展開。まんがの裾
野を広げようと、似顔
絵活動や子どもまんが
教室を開催しており、合
同作品展も好評だ。歴
史を刻むまんがグループ
の存在は、高知のまんが
文化の分厚さを実感さ
せてくれる。

を発足させたのは、平成27年の「しまんと漫博」がきっかけ。この時、ゲストとして訪れていた地元出身のまんが家安倍夜郎先生と井上淳哉先生に、「地元でまんがやイラストを描きたい人には、画材に触れる機会や描き方を教えてあげられないか」という思いを伝えたところ、心強い賛同を得られたのだ。

職業もさまざまだ。「まんがを描く楽しさはもちろん、人に見てもらえる喜びも知つてほしい」という思いから、地元の天神橋商店街に設けた部室でまんが講座を開いたり、部員たちの作品をまとめたまんが冊子の発行や展示会などを行う。

の代表。高知県立中村高校の出身で、代表作『深安倍夜郎先生は先輩、ゲームイラスト等を手がけた後輩という間柄。同人活動を経て、もう一人のさんと出会い、平成28年に「四万十漫画倶楽部」は、地元小学校でまんが講師も務める。

みんなで描こうよ! まんがサークルを訪ねる

まんが好きが集まり、交流活動を行う「まんがサークル」。中心部から遠く離れた街にも、まんが愛あふれるコミュニティがある。



清流・四万十川が流れる高知県幡多地域。高知市内から車でおよそ2時間の距離にあるこの地域にも、まんが好きが集うまんがサークルがある。「四万十漫画俱楽部」、通称「しまくら」だ。

現在は老若男女およそ20名が所属しており、まんがを通じた交流をはじめ、プロの漫画家のサポートまで実施している。

代表の天野さんが「しまくら」

田舎町のまんがサークル 『』の漫画部の不穏



俱楽部誌の発行をはじめ、天神橋商店街の観光マップや、「幡多妖怪地図」といった地元の紹介パンフレットを手がけている。展示会や同人誌の即売会などにも参加している。



言わずと知れた施設から隠れ名所まで…

まんが王国・土佐 探訪のススメ



05 横山隆一記念まんが館

昭和を代表する4コマまんが「フクちゃん」の作者、横山隆一先生を顕彰する施設。その生涯や作品に迫る展示をはじめ、プロ・アマ問わず参加できる「4コマまんが大賞」の開催など、まんが文化の振興に努めている。※改修工事のため閉館中、令和5年4月に再開予定。



04 海洋堂スペースファクトリーなんこく

見るからにSF風の外観が、訪れる人をワクワクさせる。世界的なフィギュアメーカー「海洋堂」の生産現場を見学したり、ジオラマづくり体験を行うこともできる。好きなまんがのキャラクターを探してみよう。

「まんが王国・土佐」のスポットは、高知県内のあちこちに。実際に訪ねて、高知のまんが文化を発見してみよう!



02 香美市立やなせたかし記念館 アンパンマンミュージアム

高知県香美市は、「アンパンマン」の原作者、やなせたかし先生の故郷。アンパンマンミュージアムには、やなせワールドの世界観を集約したジオラマや原画ギャラリーがある。親子で訪れてみよう。



01 大川上美良布神社

しばてつや先生をはじめ、総勢31人の著名漫画家によって描かれた、豪華絢爛な天井絵がある神社。四神獣や干支などが、漫画家それぞれのタッチで描き上げられており、作風を見比べてみることも楽しい。



07 サイバラ電停

とさでん交通の路面電車が停車する電停には、地元出身の漫画家、西原理恵子先生が描いた観光案内板も。豪快ながら親しみやすいタッチのイラストに、独特な言い回しで地元の見所を紹介。思わずクスッと笑ってしまう。



06 はりまや橋商店街 顔ハメまんが看板

高知新聞で連載中の4コマまんが『きんこん土佐日記』の作者、村岡マサヒロ先生が描いた顔ハメ看板。想像より小さいことから、「日本三大がっかり名所」と言われる「はりまや橋」を、面白く盛り上げる発想が、まんがらしい。

この地図に記載されているまんがスポットは、まだまだほんの一部。実際に現地を巡りながら、まんがをこよなく愛する高知県民と交流してみて。



03 ごめん・なはり線 駅キャラクター

高知県東部へと続く「ごめん・なはり線」。その21駅それぞれに、やなせたかし先生によって描かれた可愛らしいキャラクターが! それぞれの駅がある地域の名産物や逸話などをモチーフにしており、観光客を出迎えてくれる。



09 海洋堂ホビー館四万十

「海洋堂」創業者の宮脇修氏が高知県大方町(現黒潮町)の出身であることをきっかけに開館した、「へんびなミュージアム」。四万十川が流れる景色を進むと、圧巻の施設が現れ、約8000体のフィギュアが展示されている。



08 まんが神社

中土佐町大野見の山間部にありながら、「まんが甲子園」の優勝祈願のため、全国から高校ベンチたちが訪れるという一風変わった神社。御社殿内には「摩訶不思議かつユニークなご本尊が祀られている」という噂も…。



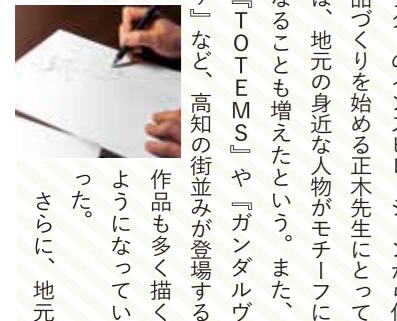
12 後免駅

©やなせたかし

正木先生がこれまで描いた作品。東京時代は、とにかくまんがの世界を追求していた。高知に戻ってからは、現実の世界をモチーフに描くことが多くなったという。



骨精神を込めていました。後になつて受け取つたファンレターの中には『この作品を読んで、大人には負けないぞと思ひながら定期制の高校を卒業した』という声もあり、何かを伝えられたのかなど思います」。その後も東京で執筆活動を続けていた正木先生だった



若き漫画家がなぜと 駆け抜けた青春時代

正木先生の作品は、編集者の目に留まり、そのまま誘われて投稿したコンテストで最終選考まで残るという大健闘を果たす。やがて、「デビュー」を前提に東京に来ないか」という編集者のスカウトが。この誘いに正木先生は、二つ返事で「行きます！」と答えだつた。弱冠22歳という若さだつた。

まんがの夢を追つて、プロデビューオー。
高知を描き続ける、漫画家の物語。

A composite image. On the left, there is a vertical stack of Japanese yen bills. On the right, a man with short hair and a beard, wearing a straw hat and a dark t-shirt with a graphic of a map of Japan, stands smiling. The background is a plain, light color.



エフエム高知で毎週金曜日に放送中の「プライムトーク」に出演した時の正木先生。正木先生の出番回は、令和4年7月1日、8日の2週にわたってオンエア。



高知の漫画家の物語

高知県出身の漫画家、正木秀尚。少年サンデー増刊号に掲載された作品『がんばれポストマン』でデビューを飾つて以来、37年にわたって、織細な書き込みとダイナミックな躍動感を併せ持つ、独特な作品を執筆し続けている。

そんな正木先生がまんがを描き始めたのは、まだ幼かつた当時、近所のお兄さんに目の前で描いてもらつたアニメのイラストがきっかけ。「まんがって自分で描けるんだ！」と衝撃を受けましたね。小学生の頃にはもう、小さな連載漫画家になつたつもりで、毎日まんがを描いてました」と幼少期を振り返る。当時は、特撮ヒーローやロボットアニメの全盛期。『仮面ライダー』の原作者、石ノ森章太郎に絶大な影響を受けながら、SFファンタジーの世界に浸る少年時代を過ごし、進学した土佐高校では漫画同好会を発足させるなど、気がつけば、まんがの世界にどっぷりとのめり込んでいた。

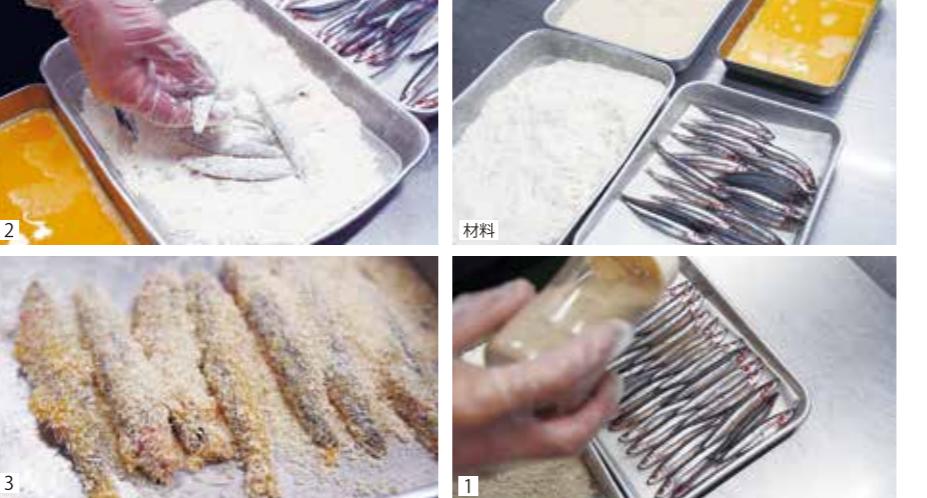
転機が訪れたのは、大学4年生のこと。友人と一緒に東

高知の風土に育まれた「土佐人」たちは
今日もそれぞれの分野から「土佐の風」を発信
そこに新たな文化を重ねながら…

まんがに目覚めてから
ずっと描き続けてきた
高知の漫画家の物語

▶用意するもの(2人前)

きびなご……適量
溶き卵……1個
小麦粉……適量
パン粉……適量
塩……少々
コショウ……少々



1 きびなごの表面のヌメリを取るため、まずは優しく水洗い。キッチンペーパーで水気をしきり取ったら、塩・コショウで下味をつける。

2 小麦粉をまんべんなくまぶしたら、表面がサラサラになるように小麦粉をはたく。

3 さらに、溶き卵・パン粉の順にまぶし、冷蔵庫で10分ほど寝かせる。

4 170~180度に熱した油で揚げる。目安は3分。衣がキツネ色になるまで、こんがり揚げる。

5 塩・ソース・タルタルソースなど、お好みの味付けを用意。

おたからレシピ

ひとくちメモ

きびなごは鮮度が大事。宿毛市ではその日に揚がったばかりの新鮮なきびなごが食べられるがよ。きびなごをフライで美味しく食べるなら、衣を薄くすることがおすすめ。サクサクとした食感で、きびなごの旨味がしっかりと味わえるがよ。きびなごはいろんな調理方法があって、酢でしめておか寿司をくるむ郷土料理もあるがやき。

まだまだある!

【きびなごのほかぶり】

高知県内で伝わる郷土料理。きびなごを丁寧に背開きし、酢でしめる。塩や砂糖を加えだし汁を煮立て、おからを炒る。炒る際は酢を加えて調味した後、きびなごでおからを包む。

【半夏だんご】

大豊町に昔から伝わる郷土菓子。だんごは、みょうがの葉に包まれており、清涼感のある独特の香り。農繁期を過ぎた後に労をねぎらったり、作付けが終わった時期などに食されている。

いなだ すなお
稻田淳さん

にした ともかず
西田友和さん

き
び
な
ご
フ
ラ
イ



【きびなご】

体長10cmほどの小魚のため、鮮度の管理が難しく、全国の市場で見かけることは少ない。高知県宿毛市では、新鮮なきびなごがスーパーに並び、どの家庭でも親しまれている。

場所 宿毛市 旬 4~6月

地域で馴染みが深く、老若男女に愛される小魚アレンジも多様

高知県の西の端にある宿毛湾は、「きびなご」の漁獲量が多いことで知られ、地域で日常的に食べられてきた。「今となつては漁獲量が減り、希少価値が高くなりましたが、地域では昔から老若男女がおやつのようによく食べていますね」と、地元で飲食店を営む西田さん。その日水揚げされた鮮度の良いものが、地元のスーパーに並ぶ。きびなごフライは、「さつと揚げるだけ」というシンプルな料理。もともと骨は柔らかく、はらわたの苦味も少ないため、サクサクとした食感の姿揚げとして、まるごと美味しく味わえる。刺身やお寿司、南蛮漬けなど、自由自在なアレンジで親しまれるきびなごは、海の幸に富む宿毛湾に面した地域だからこそ味わえるごちそうだ。



高知を代表する書店の変わらぬ心構え

高知県民なら誰もが知るだろう、帯屋町の老舗書店「金高堂」。店長を務める亥角理絵さんは、創業者である祖父と、店舗拡大に奔走する父親の姿を見て育った。「父は、高知と東京を往復する生活。大手出版社や出版取次会社との会議には欠かさず顔を出していました」と理絵さん。そのため「高知を訪れたなら金高堂に」と足を運ぶ関係者も多い。全国の書店にも

劣らぬ本の流通を高知県で実現した、その功績は大きい。店長ながら大好きな書店の売り場で働く理絵さん。新しい本を手に取りながら、どんなふうに売り場に出そうか考える。「何かオススメない?」というお客様の声に、いつでも応えられること。今も昔も変わらない、老舗書店の心構えだ。



売り場づくりのモットーは「しわく(※土佐弁で「しつこく」)、長く!」。この姿勢から生まれた書店のロングセラーもあり、写真の帯にもある通り、全国でこの本を一番売った書店になっている。5年連続で、今なお記録更新中だ。

温故知新 土佐の業

今回の
テーマ

書店員

土佐に息づくさまざまな職人ワザ。
伝統の傍らに、
常に新しい展開があることも、
土佐らしい特徴の一つだ。
今回は、土佐の書店員をテーマに
いざ、温故知新!

TSUTAYA 中万々店

やまなか ゆき
山中由貴さん

平成17年から「TSUTAYA 中万々店」に勤務。本を紹介するフリーペーパー「なかましんぶん」の編集長も務め、SNSで情報発信もしている。



漫画家の浦沢直樹先生も、イベントで高知を訪れていた際に来店。山中さんは、浦沢先生のコーナーをポップで作って出迎えたのだと。

取材協力／黒笠慈幾(南国生活技術研究所)



話題の書店員として活躍することで、本の売り上げに貢献。編集者より依頼を受けて、表紙イラストや帯、解説を担当したことなどもアップしている。



TwitterやYouTubeでも情報発信。毎年1月と7月に、山中さんオリジナルの文学賞「山中賞」の表彰式などをアップしている。



売り場づくりでは立体工作も行う。手にとって遊べる立体作品や、およそ一ヶ月を費やしてつくった模型などもある。



毎月発行のフリーペーパー「なかましんぶん」では、書店員が実際に読んで「素晴らしい」と感じた書籍や、お店のイベントなどを紹介。



「まずは本を身近に感じてほしい」と、立ち読みならぬ「座り読み」を誘う椅子をたくさん設置している。



書店の入り口には、高知県に関連する書籍や、それに付随する雑貨なども展開。地元への読者の関心を高める。



手書きのポップは、描き手の個性が光るもの。亥角さんはイラストも織り交ぜながら下書きなしで描き上げてしまう。



書店に着けば、まず目に飛び込んでくるのが大きなポスター。高知県出身の作家の新刊や、話題の書籍を伝える。



SNSで活躍中のフォトグラファー
「ごま塩」の一言

越知町商店街MAP

越知町商店街を歩けば、目につくのが昭和レトロな看板やのれん。昔ながらの商店のみならず、新しいグルメ店もオープンしている。商店街の中心部にある中町駐車場が利用可能だ。

昔ながらの景色に
変わらない日常が流れる
商店街を歩いてみて

今回、商店街を撮影した、フォトグラファーの「ごま塩」さん。「撮影中、まちの人たちの笑顔の連鎖が自然と広がる、とても温かい町でした。昔ながらのお店や看板が残り、新しいものとともに大切にされていました」と話す。撮影中には、商店街を行き交う人同士で、自然と始まる会話や手を振って挨拶する日常の光景も見えた。

・Instagram/@g0mash1o



WASHI ORIORI
さとう よしあき たけやまみき
齋藤与志彰さん・竹山美紀さん

ランプシェード作家と紙作家のご夫婦が営む、和紙雑貨のお店。屋号には「四季折々で移り変わる和紙を楽しんでほしい」と、いろいろな意味を込めている。



結城食品・結城英文さん
ゆうき ひでのみ
立仙俊彦さん・さとのさん

「越知町出身者は、みんなこの豆腐を食べたことがあると思うで!」と話すのは、3代目店主の英文さん。豆腐製造はもちろん、食品の卸や小売販売、イベント出店にも力を入れる。



仙八
りっせん としひこ
立仙俊彦さん・さとのさん

昭和62年創業の、町内外から愛され続ける定食屋。越知町名物の山椒を使った「山椒入りからあげ」や、創業当時から人気の「トンカツ定食」を求めて訪れるリピーターも多い。



谷脇旅館

創業は明治13年。当時の面影を残す、日本家屋の老舗旅館。吉田茂元首相が宿泊した部屋も残っているという。風情ある店構えで、玄関では大きな松が宿泊客を出迎える。



越知町商店街

仁淀川が流れる高知県越知町の中心街。昔から続く伝統行事や老舗のお店など、良き時代の姿を色濃く残す町並みが魅力。地域住民が長い時間をかけて共に築き上げてきたこの場所では、新しい活性化の動きも始まっている。

東西でおよそ900メートルもある越知町商店街は、その歴史も長く、今でも昭和レトロな雰囲気が漂う。パン屋や電気屋、鮮魚店など、古くは明治13年から続くところや旅館など、さまざまなお店が軒を連ねている。

新しい精神が響き合う
長い長い商店街

自身で10代目となる越知町商工会長の坂本健常さんは、「たくさんのお店が連なつて、ガチャガチャして感じが好きやね。困ったときは、いつでもみんなが駆けつけてくれると、笑みをこぼしながら話す。」と、笑顔を見せてくれた。夕暮れ時に、近隣の学校から力がない商店街の役目。毎年11月10日には、100名にのぼる参加者が、衣装に身を包んで町を練り歩いて行われる伝統行事「おなばれ」も開催される。

近年では地域おこし協力隊が、商店街の事業者と共に、レトロな看板に着目したスタンプラリーなどを開催。坂本さんは「昔に比べたらお店は減ったけど、バイパスよりもたくさんのお店がある。地道な努力を積み重ねていきたい」と意気込み、笑顔を見せてくれた。

つないでつむいで

県史編さん室

高知県について伝え残されたさまざまな資料を調査し、本

県の歴史を詳細に記したもの。郷土の歴史を知る、大切な手

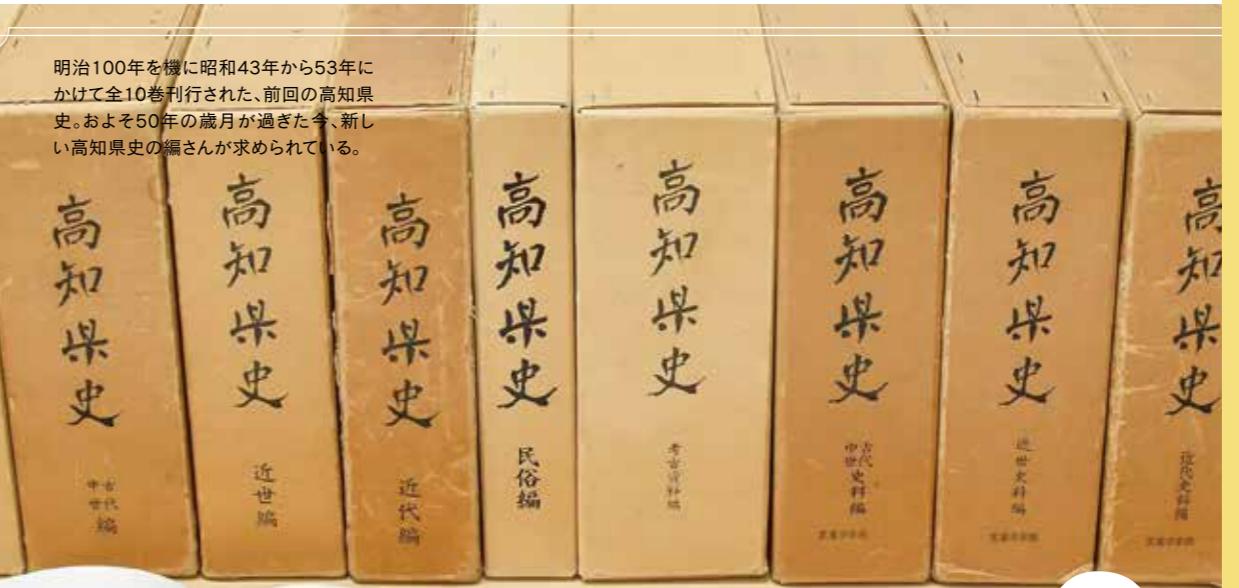
がかりだ。

高知県史（自治体史）とは？

50年ぶりに
はじまりました。

高知県庁に
県史編さん室が発足！

現在、私たちが手に取ること
ができる『高知県史』は、明治百
年を機に刊行されたもの。その
後の半世紀、歴史研究は大きく
進み、従来の定説を覆すような
発見もあった。歴史のあり方が
大きく変わっているのだ。



明治100年を機に昭和43年から53年にかけて全10巻刊行された、前回の高知県史。およそ50年の歳月が過ぎた今、新しい高知県史の編さんが求められている。

高知家の家族の歴史を
みんなの力で紡いでいく

徹底的な歴史資料の掘り起
こしから、本編 資料編の刊行
まで、膨大な編さん作業を担う
県史編さん室には、県内外から
多くの専門家が関わっている。

さまざまな歴史分野に精通
する委員の協力のもと、まずは
近世・近代・民俗の三分野の調
査に着手しているが、膨大な資
料の調査をスタッフだけで進め
ることは困難を極める。

そこで、歴史に関心のある県
内の学生を中心とした「歴史資
料調査隊」を組織し、調査に必
要な知識や技能の研修を始め
ようとしているところだ。

新しい県史が完成するのは
20年後。高知家の家族みんなが
築き上げた歴史を後世に伝え
ていくため、今日も県史編さん
室は調査を続けている。

史料が語るもの語 第一回 土佐国分寺



高知県史近世部会による資料調査の様子



寺院内には多数の歴史資料が保管されている



資料が見つかった
土佐国分寺
(南国市)

国分寺に眠る古文書に ひもとかれる土佐の歴史

国分寺で行われている古文
書調査では、現在1320点
にも及ぶ文書の分類が完了
し、寺略史をはじめとした国
分寺に関する文書はもちろん
のこと、江戸時代の地域や土
佐藩に関するものなど様々な
歴史を明らかにする貴重な文
書の数々が見つかっている。面
白い話では「高知城太鼓丸の
鐘の音色が悪くなつたので、
良い音色で知られる国分寺の
鐘を献上してはどうか?」とい
つた、当時の様子が垣間見
える内容のものもあるとい
う。今後の調査で、新たな土佐
の歴史がひもとかれていくこ
とが期待されている。

こうした数々の新発見に対応
し、郷土の歴史を未来につなぐ
人材を育成するため、昨年度、
高知県庁に県史編さん室が設
置され、20年かけて新たな県史
を編さんすることになった。

例えば、高速道路の建設を
きっかけに、平成9年から行わ
れた「居徳遺跡群（土佐市高岡
町）」の発掘調査では、鋭利な道
具で傷つけられた痕跡のある人
骨や、木の表面を火であぶり石
器で削ったすきなどが出土し
た。これは、狩猟採集を中心と
した從来の縄文時代の世界觀
を大きく変える発見と考えら
れている。

現在、私たちが手に取ること
ができる『高知県史』は、明治百
年を機に刊行されたもの。その
後の半世紀、歴史研究は大きく
進み、従来の定説を覆すような
発見もあった。歴史のあり方が
大きく変わっているのだ。





資料編に向けて選別を重ねる

今回の県史編さん事業では、1巻あたりのボリュームがおよそ1000ページを数える資料編を、20数巻ほど刊行する予定。全巻では、なんと2万ページを超える膨大な分量になるが、それでも、高知県の歴史を物語る、ほんの一部にすぎない。県史を語るために欠かせない資料を厳選しなければならない。



資料編の刊行からスタート

ここまで長い準備を経て、ようやく編集作業がスタート。古い歴史文書には、現代では使われていない字体や、解読が難しい「くずし字」が使われていることが多い。これらを資料編に収録するため、古い資料を現代の出版できる文字に置き換える「翻刻(ほんこく)」の作業が行われていく。



いよいよ本編へ! 高知県史をひもとく10巻

資料調査を重ねて分かったことや、資料編を基礎にして、高知県の歴史を時代や分野ごとにひもといしていく。高知県史の本編としては、10巻ほどの刊行を予定。それぞれの時代ごとに、高知県にどのような暮らしがあったのか。それには、どのような意味があったのか。今日の私たちにつながる高知県の歴史が描き出される。

特集 高知県史ができるまで

新しい県史編さんがはじまる

歴史研究者や学芸員が参加して、郷土の歴史を掘り起こす、高知県史編さんプロジェクト。これから20年にわたって取り組まれる、壮大な道のりをのぞいてみよう。



高知に関する資料を徹底的に掘り起こす

高知県内の公的機関に残されている資料はもちろん、日本全国の博物館や図書館で保存されているものまで、高知県に関するあらゆる資料の所在を調査する。個人宅にひっそりと眠っている資料から、誰も知らなかつた高知県の姿が発見されるのもよくある話。県史編さん室では、広く情報を求めている。



膨大な資料の目録づくり

資料の情報があれば、実際に現地に足を運び、さまざまな歴史資料を撮影する。また、可能な限り撮影した資料の目録も作成する。近い将来に必ず起こるとされている南海トラフ地震に備えるためにも、どこにどんな資料が残されているのか、今回の調査でしっかりと把握していく。

坂本龍馬をはじめ、たくさん
の有名人を輩出した高知県は、
歴史文化に大きな強みがある。
私たちが生きる郷土が歩んで
きた歴史、すなわち「高知県
史」を知ることは、さまざまな
発見や、新しいヒントを得る可
能性が秘められている。

今回新たに行われる県史
編さん事業は、過去最大規模。
およそ20年もの長い期間をかけ
て、まだ知られていない、高知
県の歴史をひもといてゆく。さ
まざまな分野の第一線で活躍
する歴史研究者や、県内のそれ
ぞの地域で歴史文化を受け
継いできた県民の協力を募り
ながら、高知県の歴史を次世
代に伝える大きなプロジェクト。
その第一歩が、いま始まった。



Goal 令和22年度までに30数巻を刊行予定!

20年の歳月をかけて刊行される『高知県史』を構成するのは、20数巻ほどの資料編と、10巻ほどの本編だ。古代・中世、近世、近代、現代という時代区分で展開されるほか、考古、民俗、文化財、自然という分野ごとの歴史も描き出される。

とさぶしからの贈り物

応募締切
令和4年9月20日



株式会社わらびの
土佐手拭い／土佐川魚(水色)・土佐海魚(濃紺)
各2名様

高知県の誇る、美味しい川魚や海魚のイラストを柄にした、綿100%の日本手拭い。どちらか希望を明記して応募を。



クイズとアンケートに答えて読者プレゼントに応募しよう

クイズ まんが『土佐の一本釣り』の舞台になった町は?

- ①スマホから左のQRコードを読み込んでwebサイトにアクセス
②応募フォームより、必要事項を明記し、読者プレゼントに応募する

※読者プレゼントの応募は「とさぶしwebサイト」もしくは、官製ハガキから応募できます。官製ハガキで応募される場合はお名前・発送先のご住所・お電話番号・ご希望のプレゼント番号・クイズの解答・とさぶしを読んでのご意見やご感想、今後見てみたい特集テーマをご記入の上、下記の宛先まで締切日（令和4年9月20日）必着でお送りください。 〒781-0081 高知市北川添10-15 株式会社ほっとこうち



土佐おもしろ人間烈伝 著者 市原麟一郎

無縫に生きた土佐おどけ者の生き様に惹かれて「近代土佐における、おどけ者の探求」を行い、数々の民話を発行。そんな市原麟一郎氏が惹かれたおどけ者は「いご」「どくれ」「ひょうげ」「そそくり」「かんりやく人」「のかな奴」「おつこうがり」「てんごのかあ」「ごくどうもん」など。

とさぶし

A BRAND NEW CHAPTER akochi
TOSABUSHI

Web
リニューアル!
見てちや!

<https://tosabushi.com>



<https://www.facebook.com/tosabushi>

発行

高知県文化生活スポーツ部文化国際課

〒780-8570 高知市丸ノ内1丁目2番20号(本庁舎5階)

Tel 088-823-9793 Fax 088-823-9296

E-mail 140201@ken.pref.kochi.lg.jp

発行日:令和4年6月30日(季刊)

企画 とさぶし編集委員会

制作 ほっとこうち

バックナンバーの入手方法

お近くに配布先がない場合は、送付を希望されるバックナンバーの号数と部数、送付先、
氏名、連絡先(電話番号)をご記入のうえ、送料分の切手をお送りください。受取次第、発送をいたします。
※連絡先は、バックナンバーの在庫がない場合や切手の過不足があった場合などに使用します。

【送料】

1冊 140円

2冊 180円

3冊 215円

4・5冊 310円

6冊以上の場合は、一度ご連絡ください。

お問い合わせ・送付先は、

高知県文化生活スポーツ部文化国際課(上記)まで。

次号予告

「土佐のスパイズ」

令和4年9月30日発行予定です。

お楽しみに!

*内容は変更になる可能性がございます。予めご了承ください。

LINE@でも情報配信中!



とさぶし

と友達になろう!



表紙イラスト／4コマまんが 村岡マサヒロ